

第2章 刈谷市の現状と課題

1 刈谷市の現状

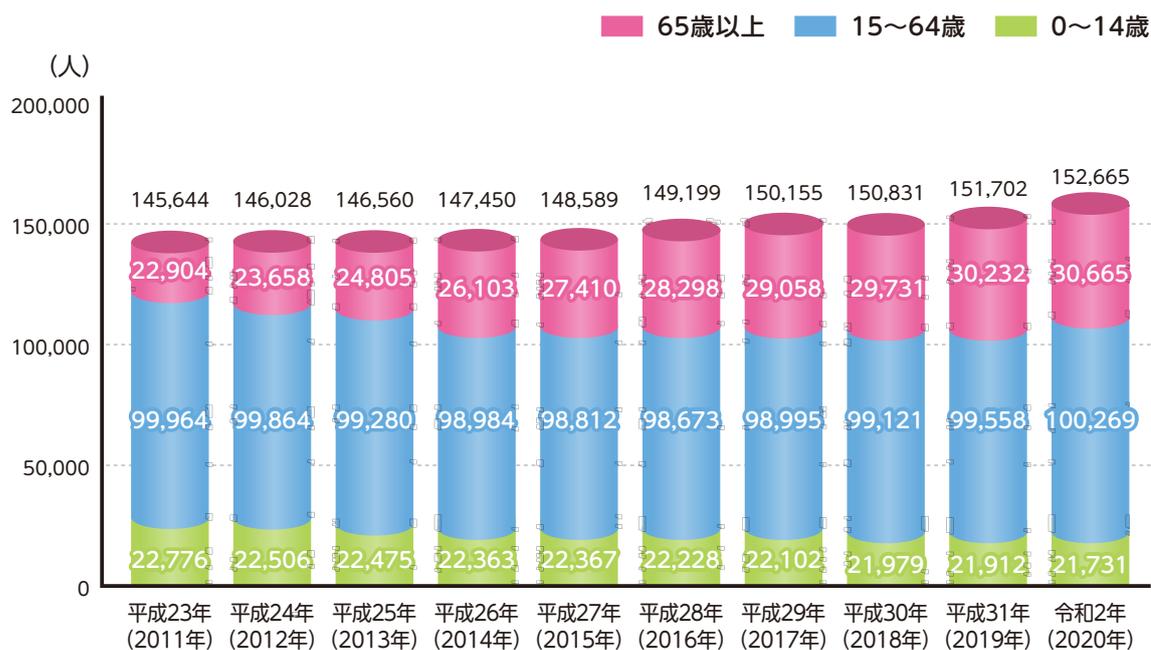
◆ 統計指標から見る現状

(1) 人口の推移

総人口は、令和2年（2020年）に152,665人となっています。年齢3区分別でみると65歳以上の人口が増加しており、高齢化が進んでいることがわかります。



図表1 人口の推移



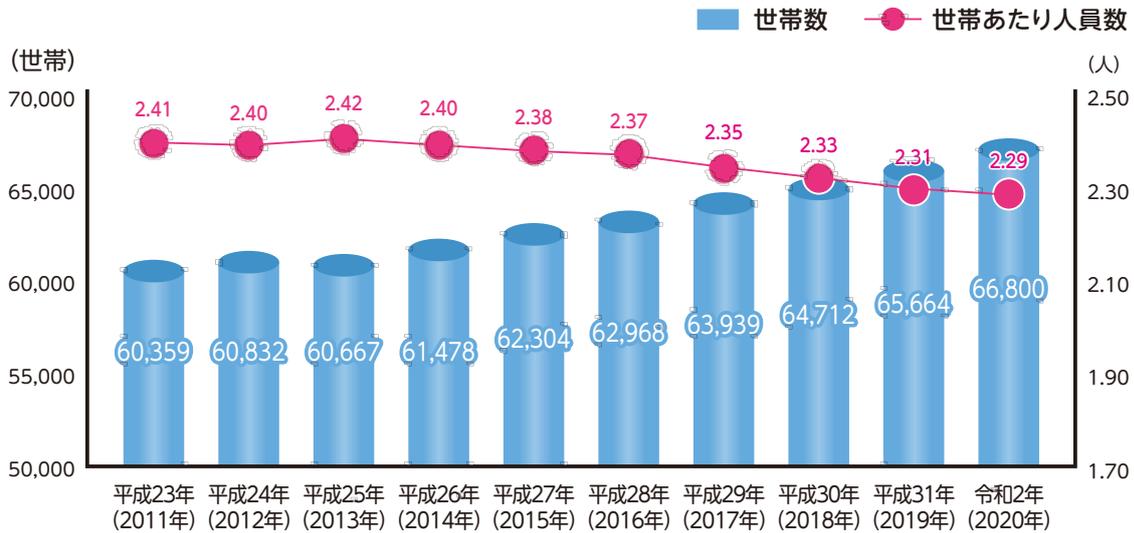
資料：住民基本台帳（各年1月1日現在）



(2) 世帯の状況

世帯数は、令和2年（2020年）に66,800世帯となっており、平成23年（2011年）より約6,000世帯増加しています。一方で世帯あたりの人員数は減少しており、令和2年（2020年）で2.29人となっています。

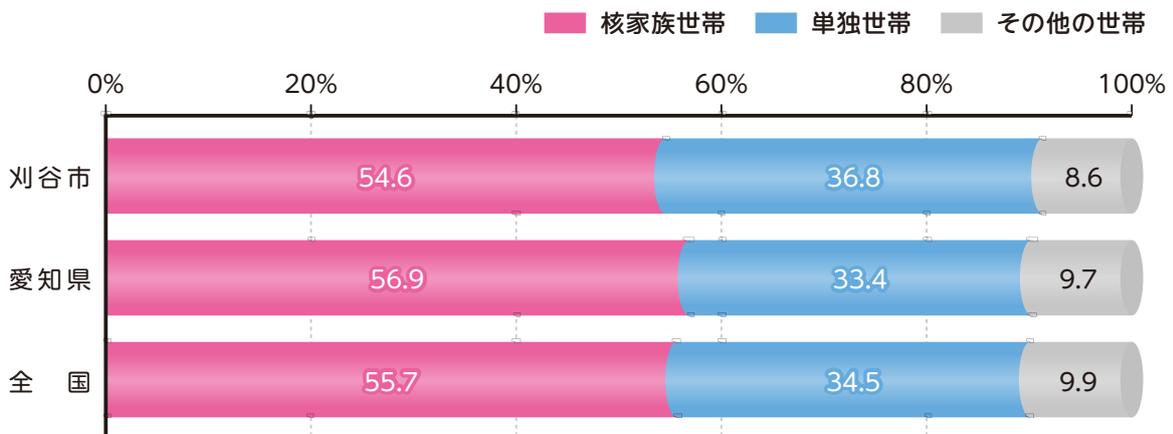
図表2 世帯数及び世帯あたり人員数の推移



資料：刈谷の統計（各年1月1日現在）

世帯種別についてみると、単独世帯が36.8%となっており、国や県と比べてやや高くなっています。

図表3 世帯種別割合

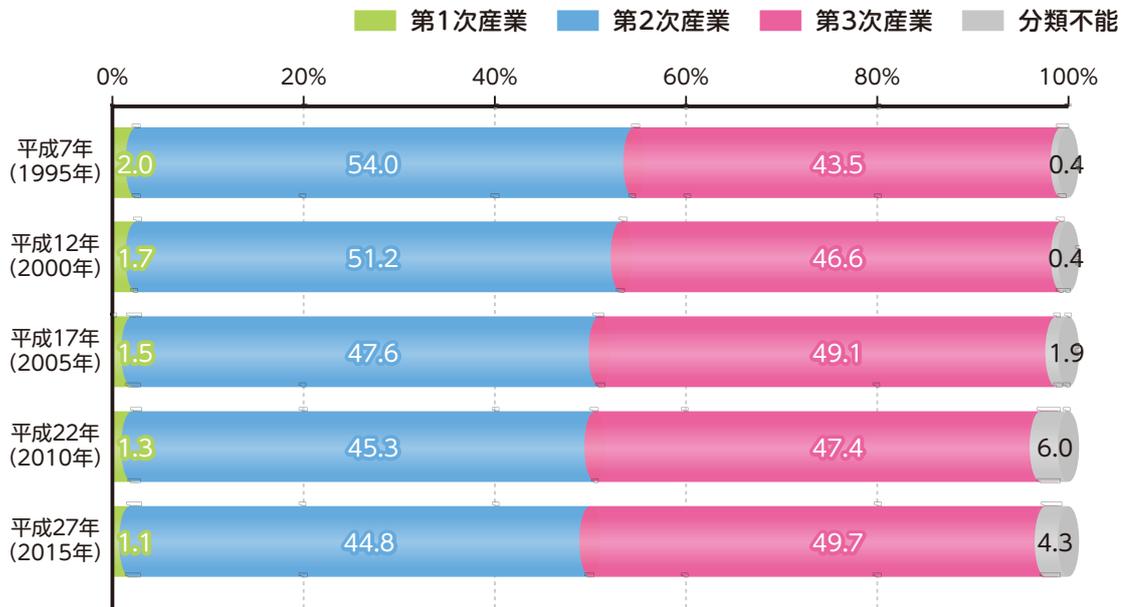


資料：国勢調査（平成27年(2015年)）

(3) 産業別就業者割合の推移

産業別就業者割合の推移についてみると、第1次産業及び第2次産業が減少し、第3次産業が増加している状況となっています。

図表4 産業別就業者割合の推移

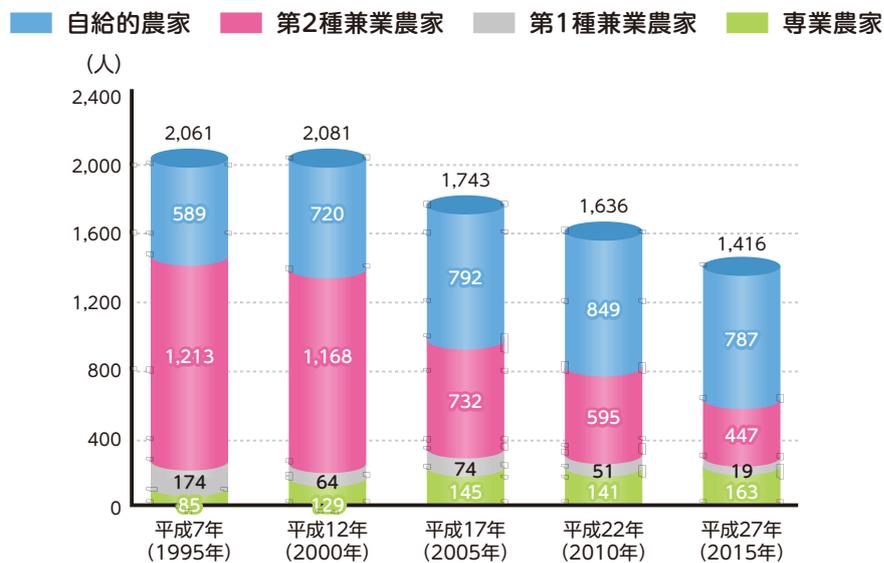


資料：国勢調査

(4) 農業の状況

農家戸数の推移について、平成27年（2015年）では1,416戸となっており、平成7年（1995年）より約600戸減少しています。農家種別でみると、第2種兼業農家が最も減少している状況となっています。

図表5 農家戸数の推移

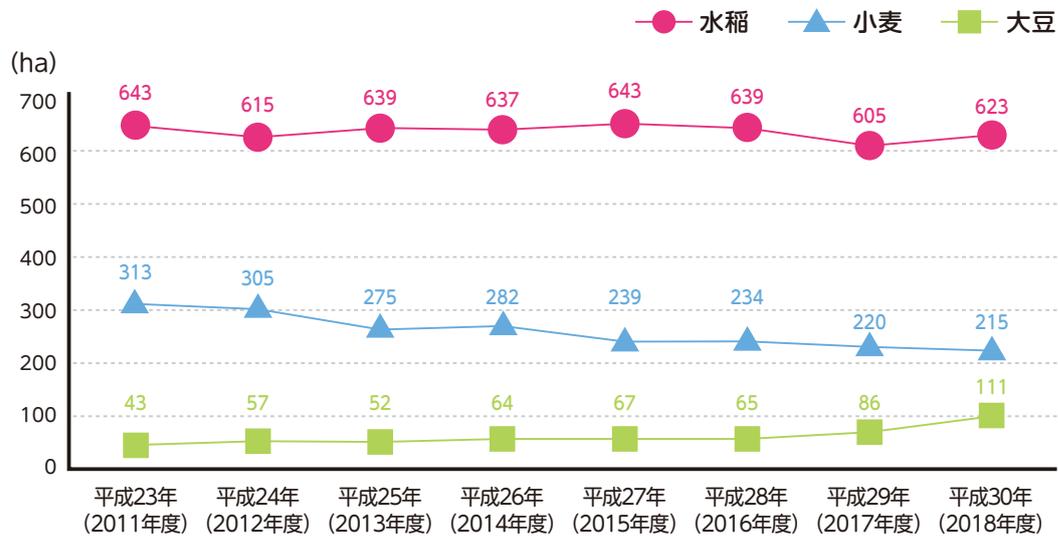


資料：農林業センサス



作付面積の推移についてみると、小麦の作付面積は減少しており、大豆の作付面積は増加している状況があります。

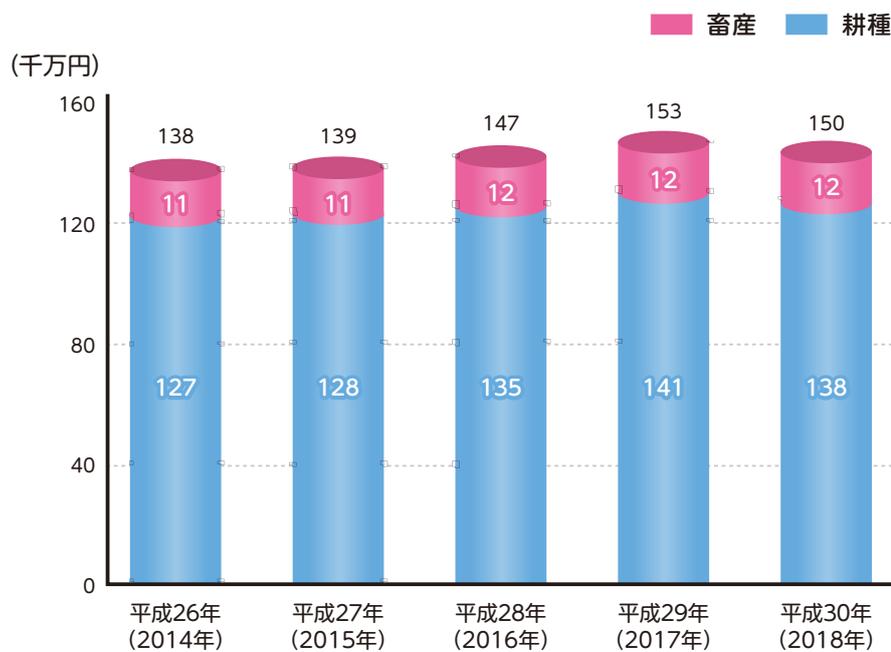
図表6 作付面積の推移



資料：愛知県統計年鑑

農業産出額の推移についてみると、平成30年（2018年）では、15億円となっており、平成26年（2014年）より1億2千万円増加しています。

図表7 農業産出額の推移



資料：市町村別農業産出額（推計）

◆ 刈谷市の食育の現状

刈谷市の食育の現状は、第1次刈谷市食育推進計画の4つの基本目標に対し、アンケート調査の結果を踏まえ、整理しました。

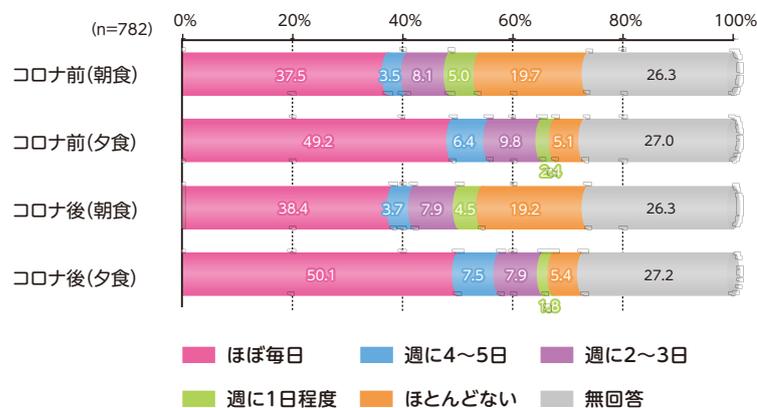
「食」で豊かな心をはぐくむ

アンケート調査では、家族と一緒に住んでいる人の中で、夕食をほぼ毎日家族と一緒に食べる割合は50.1%（前回61.2%）となっています。まだ半数近くの方が家族と一緒に食事をする機会が少ない状況です。刈谷市では単身世帯が多く、だれかと一緒に食事をする機会が少ないことが考えられます。だれかと一緒に食べることで食事が楽しくなり、より一層おいしく感じるすることができます。できるかぎり家族や友人、同僚、近所の人などとコミュニケーションを図りながら楽しく食事をとることができる環境をつくっていくことが必要です。

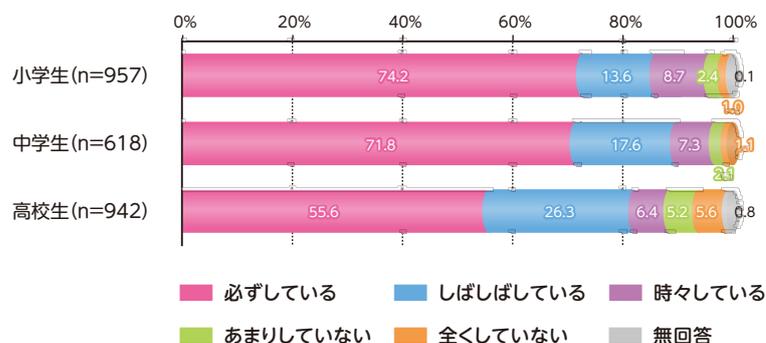
刈谷市では、園や学校、保健センターなどにおいて、子どもたちに対し、食事のあいさつの定着や感謝の気持ちをはぐくむ教育を行ってきました。また、農業体験や料理教室・料理コンテストを行い、体験を通して食への関心を高めてきました。

食事のあいさつは小中学生の7割、高校生の5割が必ずしています。自然の恵み、生産者、調理してくれた人を思い、感謝の気持ちを持つことは、「思いやりの心」「感謝する心」といった豊かな人間性をはぐくみます。今後も食が多くの人や物に支えられていることを伝えるために、体験等の機会を提供し続けることが重要です。

図表8 朝食・夕食を家族と一緒に食べる機会(单身以外)



図表9 食事の時に「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつの有無



※調査結果について、比率はすべて百分率で示し、小数点以下第2位を四捨五入して算出しています。このため、合計が100.0%にならないことがあります。



「食」で元気な体をはぐくむ

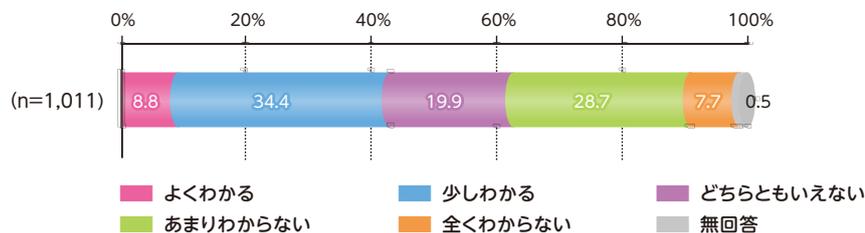
アンケート調査では、自分に適した食事量・栄養バランスを知っている人は4割程度となっています。

食育を実践している人は5割弱となっています。実践内容としては、「栄養バランスに気を付ける」と「規則正しい食生活を送る」が多くなっています。一方で、実践していない理由としては、「食育」自体よく知らないから」「好きなものを食べたいから」が多くなっています。

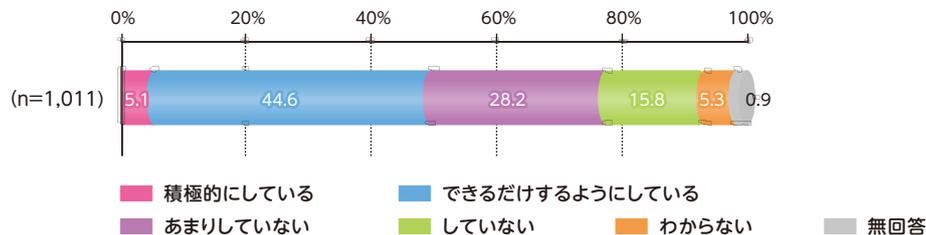
刈谷市では、保育園などの「園だより」や小中学校などの「食育だより」、広報紙を通じて食に関する情報提供を行ってきました。また、料理教室や栄養教室において食についての理解の促進を図ってきました。

食育について、正しく理解し、実践していくことは、健康な体をつくる基盤となります。今後も市民が食事の大切さや自分に合った栄養バランスを理解し、実践へとつなげていくことができるような支援が重要です。

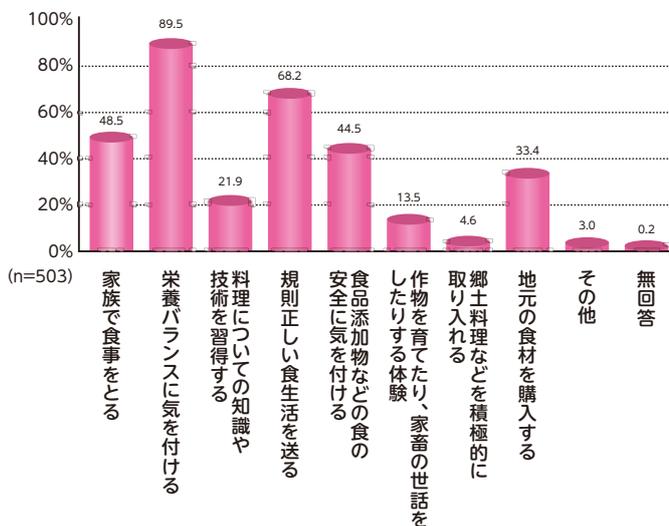
図表10 健康を維持するために、自分に適した1日の食事の量とバランスについて



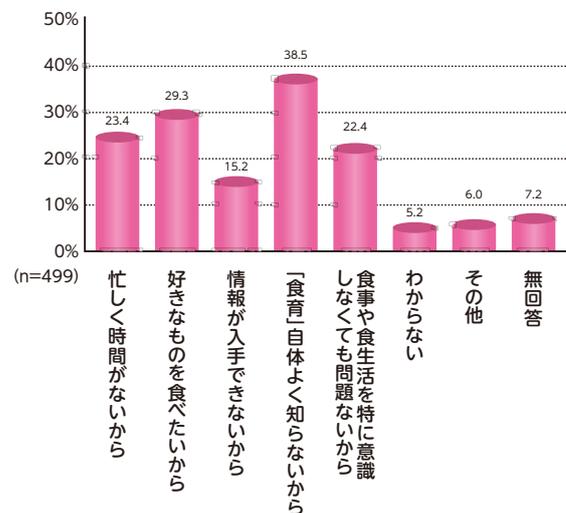
図表11 日頃から健全な食生活をおくるための「食育」実践の有無



図表12 「食育」として実践していること



図表13 「食育」を実践していない理由



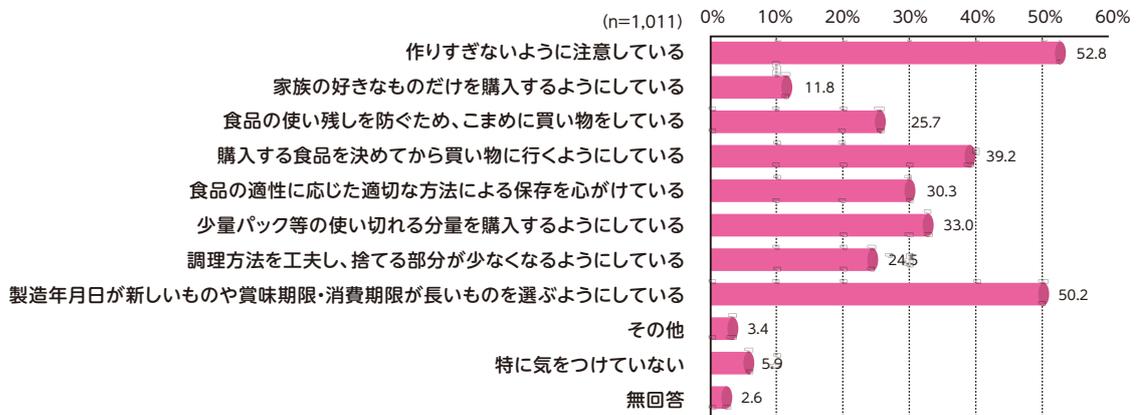
環境にやさしい「食」をすすめる

市民の9割以上が食品の食べ残しや廃棄を少なくするために意識して行動しています。また、食べ残しや食品を捨てることに関して、小中学生の9割以上が「もったいない」と感じています。

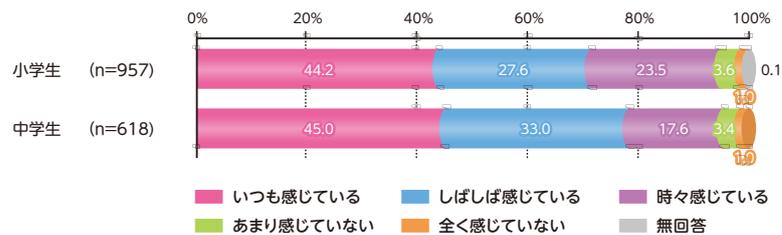
刈谷市では、調理法などを工夫し給食の食材廃棄の削減や、食べ物を無駄にしない教育を進めてきました。

地産地消は地元の農家を支援することや消費者の安心だけでなく、輸送にかかる温室効果ガス削減にもつながります。刈谷市では、イベントなどで地場産物の即売を行ったり、給食における地場産物の使用割合を高めてきましたが、アンケート調査では、地元の農水産物（三河産・愛知県産）を意識して購入している人は1割程度となっています。また、刈谷市の特産物知らない人は6割となっています。今後、地元食材を知り、購入することは旬なものを食べられるだけではなく、環境にもやさしいということ伝えていく取組が重要です。

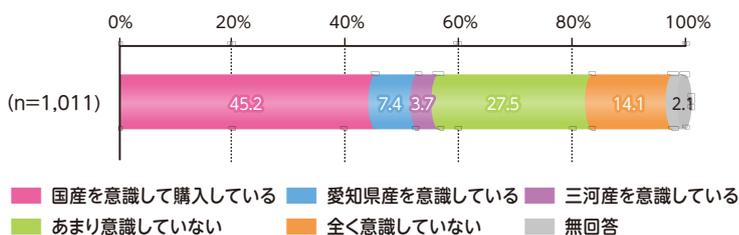
図表14 食品の食べ残しや廃棄を少なくするために注意していること



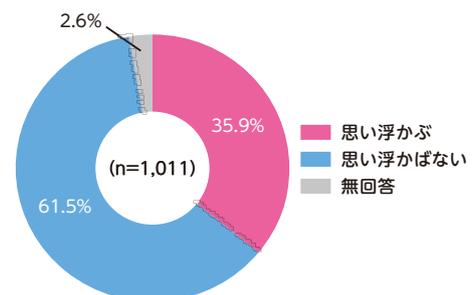
図表15 食べ残しや食品を捨てることに関して、日頃から「もったいない」と感じるか



図表16 地元農産物の購入について



図表17 刈谷市の特産物について





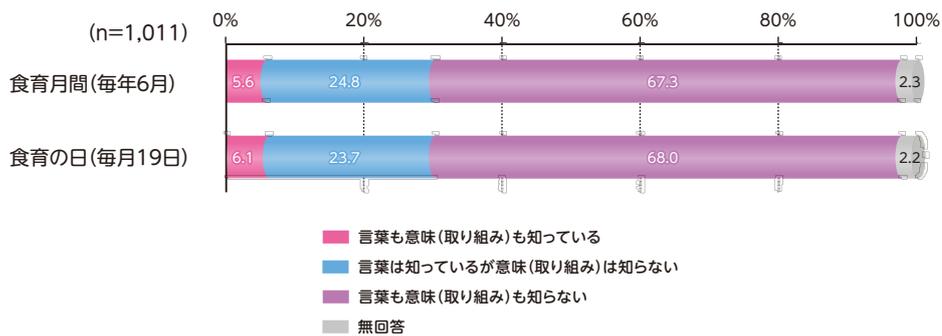
みんなで「食育」をすすめる

アンケート調査から「食育の日」「食育月間」の認知度（「言葉も意味（取り組み）も知っている」＋「言葉は知っているが意味（取り組み）は知らない」）はそれぞれ30.4%、29.8%となっています。

刈谷市では教諭や保育士へ食育の研修を実施してきました。また、団体間の連携を進めてきました。

食育は行政だけでなく、地域、団体、企業などが連携して進めていく必要があります。

図表18 「食育」という言葉や「食育」に関する取り組みについて



2 刈谷市の食育に関する課題

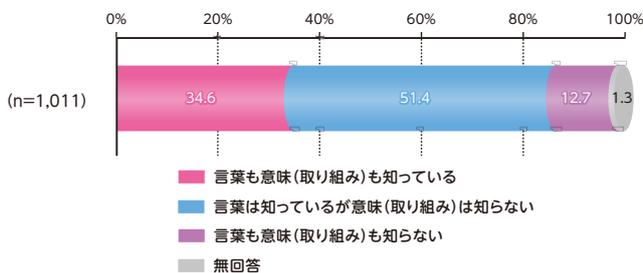
認知度の低さ

食育を「言葉も取り組みも知っている」は34.6%（前回41.2%）となっており、食育を実践していない理由は「[食育] 自体よく知らないから」が最も多くなっています。

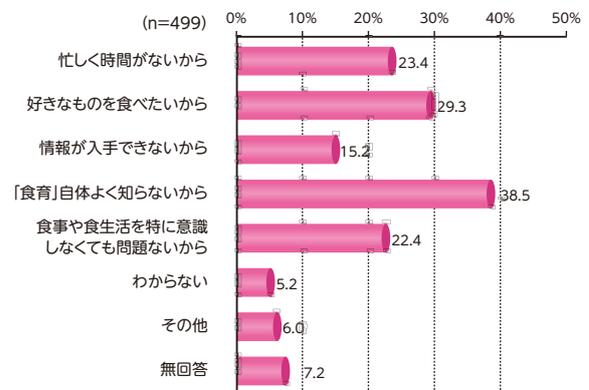
食育は言葉を知っていてもどのようなことを行えばいいかといった内容を知らなければなかなか実践ができるものではありません。

食は心身の健康に直結するものであり、また私たちの生活から切っても切り離せないものです。そのため、食育の内容をわかりやすく市民に伝え、浸透させていくことが必要です。

図表19 「食育」について



図表20 「食育」を実践していない理由

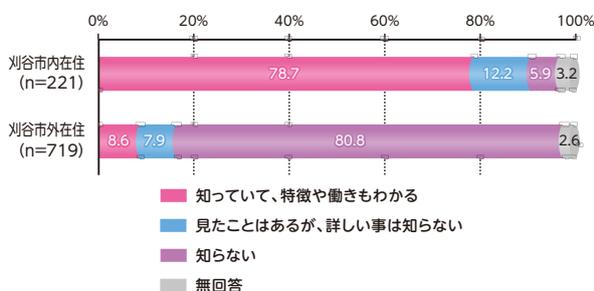


高校生への調査では、市内在住高校生の8割程度が「しょくまるファイブ」の特徴や働きを理解しています。また、食育の実践では、「積極的にしている」と「できるだけするようにしている」の合計が全体の4割程度にとどまっています。

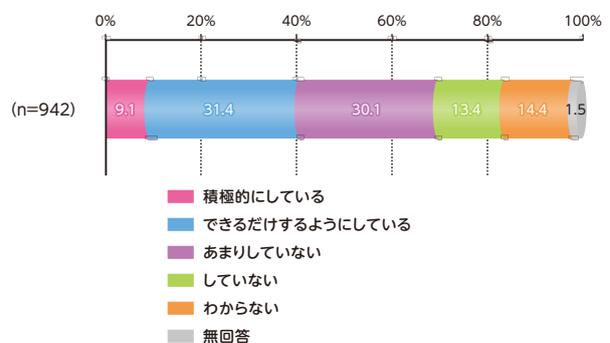
刈谷市では、小中学校で「しょくまるファイブ」を活用し、食育の啓発をしてきました。それにより、食育の理解は進んでいますが、実践につながっていないことが考えられます。

今後は食育とのつながりの啓発とともに、食育を実践できる力を身につけていく教育が必要です。

図表21 「しょくまるファイブ」について



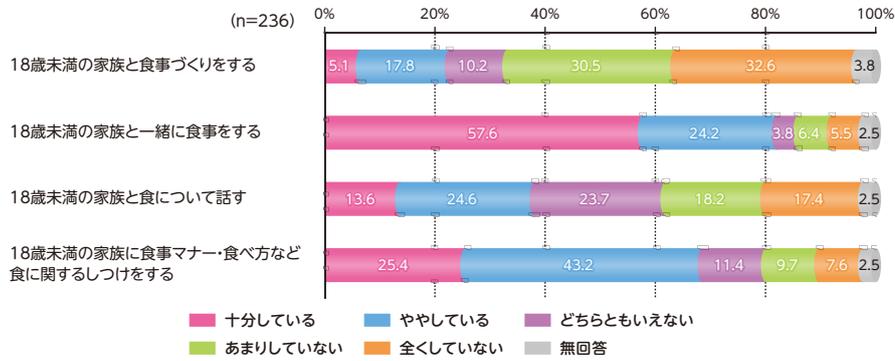
図表22 日頃から健全な食生活をおくるための「食育」実践の有無





18歳未満の家族との食育の実践について、「一緒に食事づくりをする」ことや「食について話す」ことがなかなかできていない状況になっています。
子どもの食への関心を高めるためにも、今後は家族で一緒に食事づくりを行うといった実践を進めていく必要があります。

図表23 同居の18歳未満の家族との食生活について



性別による意識の差

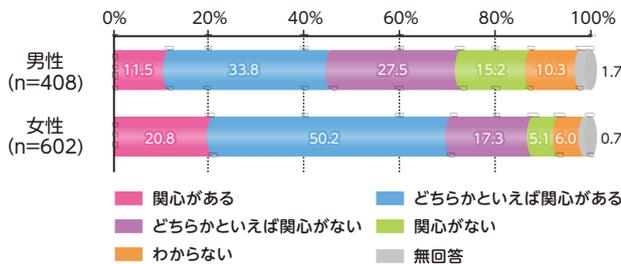
アンケート調査結果より、食育に“関心がある”（「関心がある」＋「どちらかといえば関心がある」）は女性が71.0%、男性が45.3%となっています。

また、食育の実践についても、“実践している”（「積極的にしている」＋「できるだけするようにしている」）は、女性が60.8%、男性が33.4%となっています。自分に適した食事量と栄養バランスの理解度については、“わかる”（「よくわかる」＋「少しわかる」）は、女性が48.8%、男性が34.8%となっています。

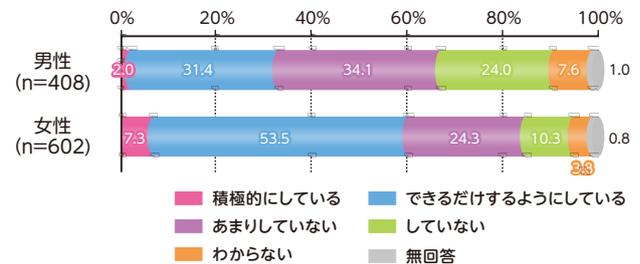
男性は、食育を知らない割合が高く、食事づくりにかかわる機会が少ないことが性別による意識の差がみられる要因の一つに考えられます。

そのため、今後は、男性が積極的に食事にかかわっていけるような取組が重要です。

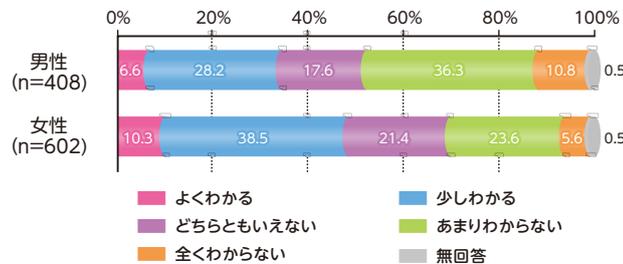
図表24 「食育」への関心の有無



図表25 「食育」実践の有無



図表26 健康を維持するために、自分に適した1日の食事の量とバランスについて





若年層の食育

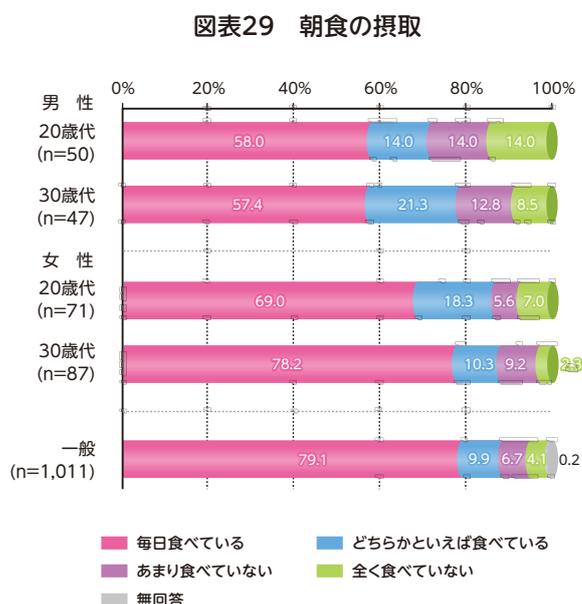
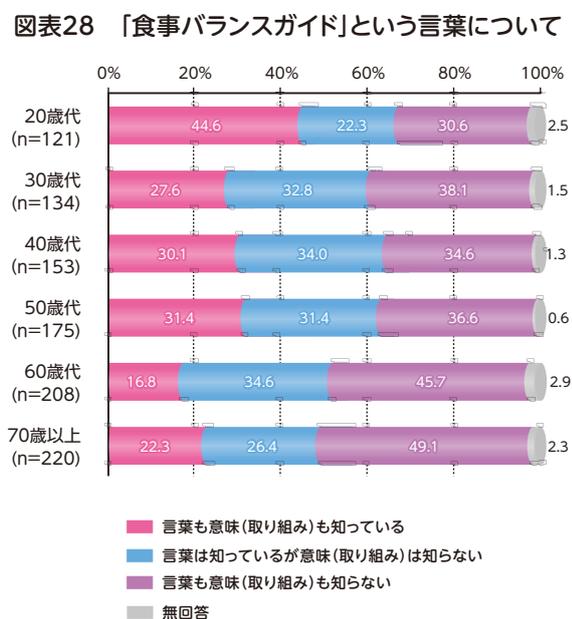
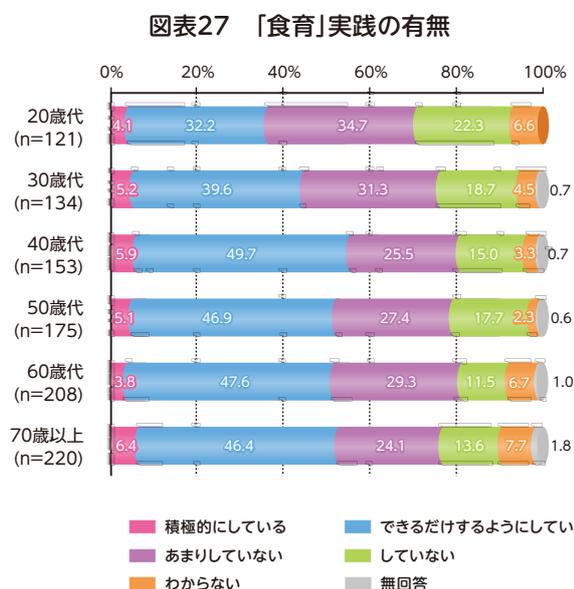
食育の実践について、20歳代のみ「あまりしていない」の割合が一番多くなっています。

また、20歳代の食事バランスガイドの認知度は4割以上が「言葉も意味も知っている」となっており、ほかの年代よりも高くなっています。

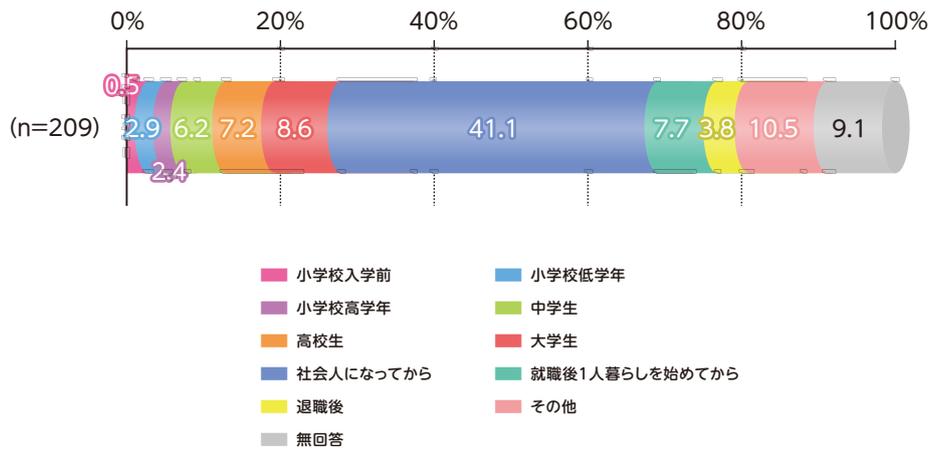
一方で、朝食を毎日食べている割合をみると、20歳代・30歳代の男性は6割にも達していない状況です。朝食を食べなくなった時期としては「社会人になってから」が4割以上となっています。

若年層は食育の理解は進んでいますが、それが実践につながっていないことがわかります。

次代の親世代となる20歳代・30歳代の食習慣は子どもの食習慣にも影響することが考えられます。また、若い世代は食に関する情報を家族から得ている割合が高いので、親は子どもへ食に関する情報を伝える役割を担っています。そのため、若年層への食育を推進し、将来親になったときに子どもへ食育を伝えられるようにしていくことが重要です。

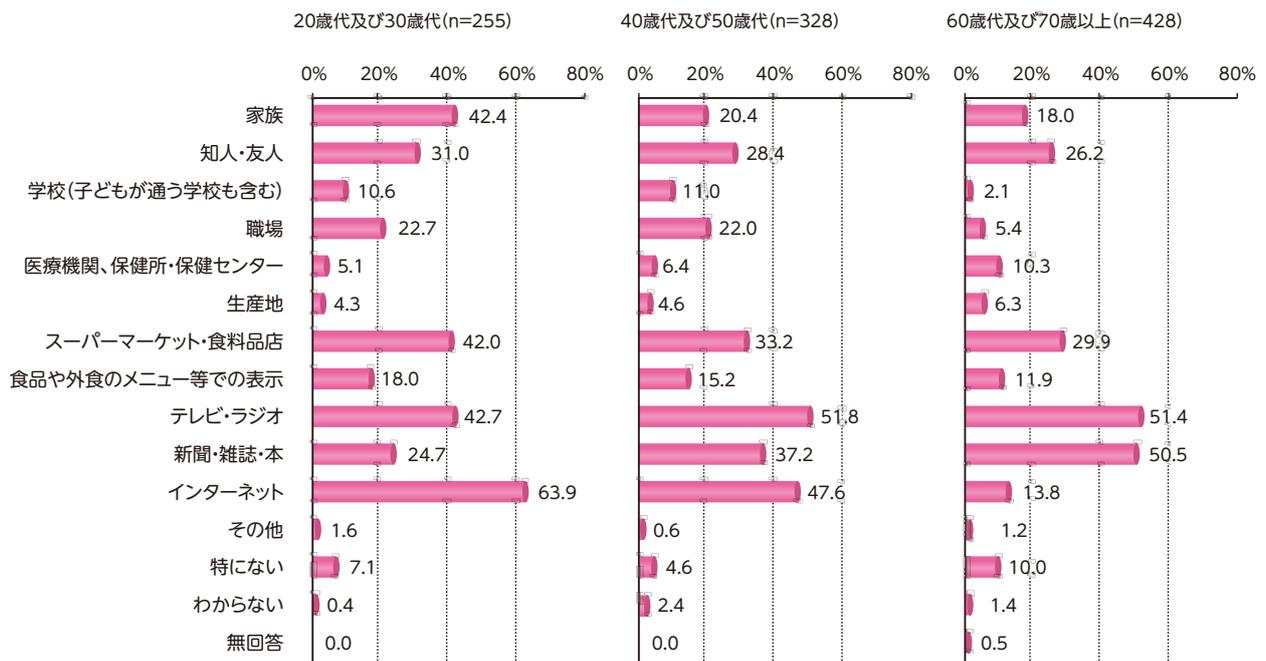


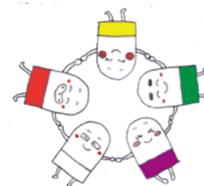
図表30 朝食を食べなくなった時期



食に関する情報の入手について20歳代、30歳代はインターネットに頼っている割合が最も高くなっています。このことからこの年代に向けた食の情報発信はインターネットが効果的であると考えられます。

図表31 「食」に関する情報の入手先





伝統食・郷土料理への関心の低さ

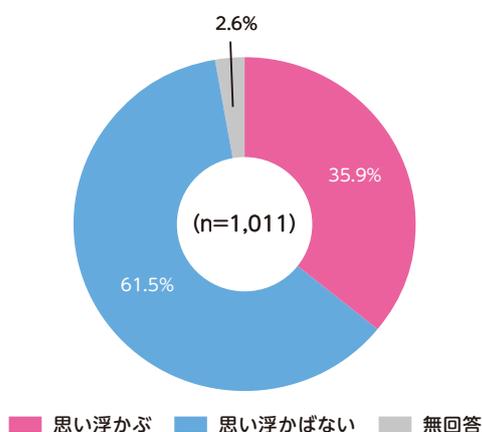
アンケート調査結果より、市の特産物や郷土料理について思い浮かぶ人が少ないことがわかります。

伝統食や郷土料理への関心は、20歳代から40歳代では“関心がある”（「関心がある」＋「まあまあ関心がある」）が5割以上になっているのに対し、50歳代以降は4割程度となっています。

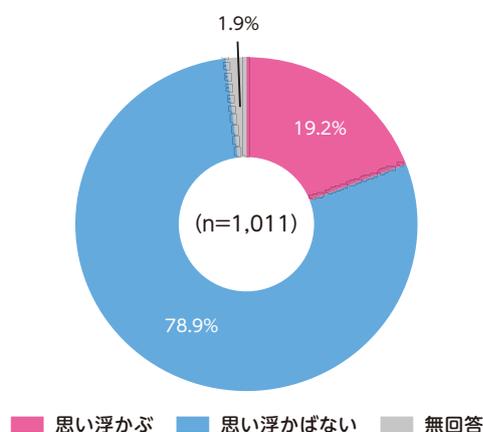
また、食育推進のため「食文化の継承のための活動への支援等」をすることが重要かどうかの質問に対し、20歳代では65%以上が“重要”（「重要」＋「やや重要」）としています。

第1次計画では、「伝統食などの食文化の継承」において、子どもや若い世代へ受け継ぐことを推進してきましたが、引き続き伝統食などを伝えていくことが重要です。

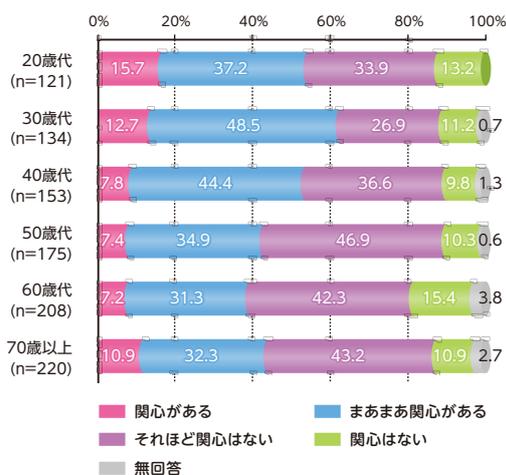
図表32 刈谷市の特産物について



図表33 三河地方・刈谷市の郷土料理について



図表34 伝統食や郷土料理への関心の有無



図表35 「食文化の継承のための活動への支援等」の重要度

